

# 猫 叢 通 信

第 117号

令和四年  
(2022年)  
7月15日発行  
(年4回発行)

「UKKARI 歌仙秘湯会」は  
どこにある？

小原 濤声

WEBアプリを  
活用した  
連句コミュニティー

UKKARI 歌仙秘湯会。それは UKKARI 島とい  
う仮想現実の海に浮かぶ連句三昧の島のこと。

その島では毎日、二十数名の連衆が各座に分  
かれ、歌仙を巻いています。興行はほぼノンス  
トップで二十四時間、いつでもどこでも座にア  
クセスできて、付句を出句できます。過去に巻  
いた作品を眺めたり、情報交換や自由なお喋り  
は「新気楼庵」といって皆の共有会議室で。また、  
連句とは別な会議室では、定期的に俳句、短



パソコンやスマホで使える Slack の画面。  
主催者の招待メールでログインする。



歌の互選会をして、得点主には「名人」「達人」  
の称号が授与されます。この連句のパラダイス  
のような島を湯守と名乗り、運営しているのが  
筆者です。一人では心細いので、至るところで  
国民的映画キャラクターの車寅次郎とその家族  
を狂言回しとして登場させ、島全体の雰囲気  
を盛り上げたり、連衆に遠慮会釈なく物申したり、  
励ましたりしています。お察しの通り、寅さん  
とその家族は筆者の分身です。映画を繰り返し  
観て、研究しているうちに、寅さんや他の役の  
台詞回しがほぼ完璧に再現できるようになり、  
思わぬ一芸が役に立っています。

この島が出現したのには数寄な謂れがありま  
す。発端は松岡正剛主宰の ISS 編集学校の詩  
歌を学ぶ講座生が縁を結んだことでした。初め  
は有志数名で、Web 上にある編集学校の共有  
スペースで歌仙を巻きながら、参加希望者  
を募り、寅さんを登場させ、場を盛り上げ  
ていたら、大変な盛況になり、編集学校の  
母家を圧迫せんばかりに発言数が伸びてし  
まいました。ついには学校本部から一旦活  
動を休止するお願いをされてしまったので  
す。さあ、連句の面白さ、一座建立の魅力  
に憑かれた連衆の勢いはとまりません。

しかし、一座を率いるようになっていた

● 目次 ●

▼「UKKARI 歌仙秘湯会」はどこにある？

小原 濤声

1

◎ 第百五十九回例会

令和四年春季例会作品 二十韻五巻

奉納俳諧之連歌二十韻

奉納後直会興行二十韻二巻

正式俳諧配役表

▼ 発句もどきの付句をやめよう——鈴木了斎

◎ 第七回猫叢会リモート 二十韻三巻歌仙一巻

◎ 第八回猫叢会リモート 二十韻四巻

◎ 令和四年えひめ俵口全国連句大会

猫叢会員受賞作品六巻

愛媛県知事賞

歌仙「秋高し」 高塚 霞 捌

▽ いざ松山……霞の一大事——高塚 霞

松山市文化協会会長賞

歌仙「髪洗ふ」 衆議判

愛媛新聞社長賞

歌仙「ひかり鏝め」 荒木 鑑 捌

南海放送賞

歌仙「火色かな」 白崎ひろ子 捌

▽ 楽しい迷路で——白崎ひろ子

愛媛朝日テレビ賞

歌仙「沈黙に」 鈴木了斎 捌

俵口実行委員会会長賞

歌仙「詩の生まる」 西田荷夕 捌

▼ 事務局だより

16 15

私は、そこで悩みました。実際に会ったことが  
ない者同士でも安心して活動できるためには、  
メーリングリストという形では空間ができてく  
いのです。昔、ニフティサーブのパソコン通信  
が盛んだった時に、ネット上でも安心で楽しい

空間ができることを経験していたことも役立つ  
ています。あの頃、インターネットが広がり、  
不特定多数に開かれ過ぎて、場が変容したこと  
も意識しておりました。

テキストのみで一座建立していくためには、  
ネット上のプラットフォームがどのような見え  
であるかが大きく影響します。読者の皆さんは  
すでに、メールとLINEではやりとりする場の  
感覚が違い、それが文章の中身や長さにも影  
響することを経験されていることでしょう。

そこで連衆から勧められた「Slack」というビ  
ジネス共有ワークのアプリを試して使ってみよ  
うということになりました。大当たりでした。

使用制限があるものの料金が無料で、場のシ  
ツラエがとても編集しやすかったのです。こ  
の時に初めて「UKKARI歌仙秘湯会」を名乗り  
ました。二〇二二年一月のことです。三十名  
の登録がありました。ちなみにUKKARIには  
二重の意味があります。「United Kingdom of  
KasenRoyal Island」歌仙王国島であるのと、  
誰もが「うっかり」をお互いに許容しあお  
うというものです。歌仙秘湯の湯守として、泉  
質や湯加減を常時調べていくことは、連句の質  
を皆と共に高めていくこと、そのために、  
猫蓑会の千恵子さんをアドバイザー的役割で島  
に上陸していただき、お仲間になっていただい  
ております。そして、常に心地よい湯加減の場  
の雰囲気を保つこと。それは私の本業である臨  
床心理士として、地域、組織、グループ、家族  
の支援をしてきたことと地続きの活動でもあり

ました。

コロナ禍で外出制限があった  
際もUKKARI秘湯では連句を  
巻き続け、それが閉塞していた  
皆の心をのびやかに解放し、連  
衆心を深めていけたことや、病  
を持っていても身体が健全な方  
向に変化した経験を伝えてくれ  
た連衆もいました。そのような  
感想を聴き、私自身もたましい  
からの喜びを感じましたし、生  
きる喜びの力を沢山いただけた  
のでした。虚心に遊び尽くせる場があることで、  
芭蕉の言う「虚にいて実を行う」こと、つまり  
は虚である風雅を愉しむ日常と実の、実に変  
な現実のあれやこれやが併存して先へ歩んでい  
けるのです。

虚と実とを言えば、まさにネットの世界は虚で  
リアルの世界は実。対面で集合して連句を巻く  
ことで、連句仲間ができていく。だから、パソ  
コンやスマホは苦手だし、そういう世界では連  
句の繋がりは薄いものになるのでは？ と考え  
ている方も多いでしょう。私も子供達がネット  
ゲームの世界で友人と付き合っていることに違  
和感を感じていたものでした。でも、大好きな  
連句を巻ければ、方法はいろいろあつていい  
と、UKKARI島のひよっこりひよっような体験  
で、新たな発見と可能性を見出してしまったの  
です。

UKKARI島の連衆で、実際に会って連句を巻



ログインすると複数のチャンネル(会議室)があり、各々  
名前が付いています。文字が小さくて読みにくいですが、  
上は私の興行案内、下は寅さんが挨拶している画面です。



いた人は誰もいません。ZOOMリモートでは、  
半数とお顔を合わせました。それでも、毎日の  
ように連句の「言葉」を介して心を通わせあつ  
ているUKKARI歌仙秘湯会の仲間は、生涯の友  
かけがえのない仲間になっています。それは、  
虚の場、虚の世界であつても、風雅と俗を合わ  
せもつた俳諧精神で楽しくも刺激的な付けと転  
じの交流をし、遊び尽くしているからなのです。  
これで実の場、実の世界でみんなと会えても旧  
来の懐かしき友人として、会えたことの感激を  
もって連句を巻けることでしょう。

思えば私たちが自分の現実と受け止めている  
ことも、実は虚の世界、仮象なる夢の世のうっ  
ろいの泡であるかもしれません。その虚の真っ  
只中にこそ、まことなる実の喜びが溢れてくる  
ように思えて仕方ありません。源泉掛け流しの  
秘湯は誰の心にも湧いている、と私は思ってい  
ます。



蚕飼の座

二十韻「咲き登り」 聖成美智子 捌

咲き登り波とも見ゆる藤の花 美智子  
 はやたけなはの曲水の宴 敏枝  
 民草は春挽糸を紡ぐらん 了齋  
 村の辻にて走る子供ら 吉文  
 遠くより祭太鼓の届く月 枝  
 灯りを消して足音を待つ 智  
 女スパイの惚れる相手もスパイです 吉  
 嘘も百回言へば純愛 齋  
 擦り切れて表紙の取れた『罪と罰』 智  
 仲良く遊ぶ猫と柴犬 枝  
 ナオ首縮めつつ漸寒の道を行く 齋  
 野山の色に身も染まる頃 枝  
 友酔うて泣きたる月の桂浜 吉  
 聞かせてやろかよさこいの歌 智  
 レトロなる路面電車で逢ひに来る 吉  
 十二時の鐘朔風が消し 齋  
 ナウ菩提寺の四方に伸びる大氷柱 智  
 峠越えれば坂のなだらか 枝  
 花の咲く日だけは人がぞろぞろと 齋  
 青いポストに止まる白蝶 吉

連衆 箭内敏枝 鈴木了齋 永田吉文

鮎波の座

二十韻「陽のまぶし」 近藤純子 捌

清明や葉裏に届く陽のまぶし 純子  
 お玉杓子の手足出る頃 忠史  
 ミシン踏み春のコートを縫ひ上げて 千恵子  
 話終はらぬ茶飲み友達 敦子  
 月の下静かにたれる吹き流し 酔山  
 本棚脇に捕虫網立て 純  
 舌足らず訛り可愛い帰国子女 史  
 初デートでもキスの巧みに 千  
 この人についていけるか占へる 敦  
 朝風呂浴びて次に朝酒 山  
 ナオ佗助を飾る客間に胡坐かく 純  
 覗いては駄目鶴の機織り 史  
 CMで結ばれてゐるあのふたり 山  
 塩梅の良き妻の枝豆 敦  
 巴里行きのスーツケースに月射して 千  
 教会はるか黄落の道 純  
 ナウ投げた球打たせてみたい二刀流 史  
 少年と猫ジャンプ競ひぬ 千  
 花よ咲け安寧の世を願ふ民 敦  
 誘ひ合はせて東踊りへ 山

連衆 根津忠史 鈴木千恵子 武井敦子  
吉田酔山

令和四年四月二十一日  
於 江東区芭蕉記念館

令和四年亀戸天神社奉納俳諧之連歌二十韻

藤房や渡る此世の橋三つ 了齋  
 東風の撫でゆく筆塚の文字 千恵子  
 小学生校歌斉唱のどらかに 美友紀  
 地球儀回す右へ左へ 忠史  
 塩田に汐引き入れる月の頃 転石  
 磯枕して初恋の夜 荷夕  
 たをやかにまたひんやりと君の腕 良子  
 弥勒菩薩の穏やかに笑む 健  
 街道の往時をしのぶみちしるべ あき子  
 あたりの草を摘んでコサージュ 暁巳  
 ナオキャンパスの夏富士長く裾を引き 雅子  
 蝉時雨して暮れる夕空 富子  
 後れ毛のほつるままにまかせたる 霞  
 次の女を乗せたナナハン 香織  
 源氏名を記す名刺に「雪娘」 徹心  
 爛酒の湯気窓の月へと たけを  
 ナウ高層ビル見上げて路地を抜ける猫 ひろみ  
 出勤いつも落語聞きつつ 純子  
 くつろげた衿も男の花衣 孝子  
 囀の降る野辺のをちこち 執筆  
 宗匠 緑華亭孝子  
 連衆 鈴木了齋 鈴木千恵子 奥野美友紀  
 根津忠史 林 転石 西田荷夕  
 本屋良子 由井 健 岩崎あき子  
 島村暁巳 武井雅子 名古屋富子  
 高塚 霞 平林香織 佐藤徹心  
 山中たけを 江津ひろみ 近藤純子

亀戸天神社奉納後 直会興行二十韻二巻

令和四年五月二十五日首尾 於カラオケ館錦糸町

二十韻「若楓」 武井雅子 捌

若楓禰宜の祝詞の朗々と 雅子  
 翡翠すいと過ぎる池の面 荷夕  
 リニアカー速度記録はいや増しに 転石  
 酒のつまみはいつも柿ピー 吉文  
 客送り降りる階段宵の月 徹心  
 おわら祭に見そめられてか 雅  
 合鍵をしのばせてある秋裕 夕  
 粹な女は涙こぼさず 石  
 コンクールシヨパンの曲をあざやかに 吉  
 カラクリ時計響く街角 心  
 ナオ 山並は深く眠りに入りたる 雅  
 凍月の下正宗を研ぎ 夕  
 限界の限界目指す好青年 吉  
 見分けのつかぬ姉と妹 心  
 文豪の日記に恋のあからさま 夕  
 お金の絡む離婚再婚 雅  
 ナウ 定年を祝ふ恩師の皺深き 心  
 軽いスキップ割れる薄氷 夕  
 大書する夢の一字花吹雪 吉  
 串を並べて紅鱒を焼く 執筆

連衆 西田荷夕 林 転石 永田吉文  
 佐藤徹心

二十韻「始まりは」 近藤純子 捌

始まりは小さき囁き青嵐 純子  
 踊子草の揺れ止まぬ園 了斎  
 時の日の漏刻に水流すらん 俊子  
 修理ないかとセールの来る 千恵子  
 十五夜の月の兎に呼び出され 美智子  
 薄を分けて逢引の道 千  
 秋雛の姫がああ娘に妙に似て 斎  
 捨てるに惜しい桐の外箱 俊  
 愛弟子と車座に酒酌み交はす 智  
 こびとの加護は寝てる間に 千  
 ナオ 欲しがらずまじめに励め人のため 斎  
 下の畑にみると伝へる 全  
 角巻の奥から覗く潤んだ眼 千  
 君待つ宿に冴えわたる月 純  
 駆け落ちの妻の話をたんたと 智  
 後姿に麝香漂ふ 俊  
 ナウ リサイクルされほの蒼きガラス壺 全  
 春曉に聞くにはとりの声 智  
 けふの出汁を板長引けば花ふぶく 千  
 ただひむがしへゆくしやぼん玉 執筆

連衆 鈴木了斎 三木俊子 聖成美智子  
 鈴木千恵子

令和四〇五年度正式俳諧配役

- 宗匠 …………… 緑華亭孝子
- 脇宗匠 …………… 武井雅子
- 副宗匠 …………… 林 転石
- 執筆 …………… 永田吉文
- 知司兼副知司 …… 佐藤徹心
- 座見 …………… 高塚 霞
- 座配 …………… 江津ひろみ
- 花司 …………… 平林香織
- 配硯 …………… 近藤純子
- 配硯 …………… 山中たけを
- (奏楽係) …………… 鈴木了斎
- (解説) …………… 鈴木千恵子
- (解説補佐) …… 林 転石
- (太鼓合図) …… 根津忠史



五月二十五日、亀戸天神社奉納を終え、正式俳諧お役の一部と、春季例会二十韻の捌が揃って記念撮影。この後、錦糸町にて食事、直会興行。

## 発句もどきの付句をやめよう

鈴木了齋

### ●テニハ切りと取り合わせ型二句一章体

歌仙一卷には、「丈高たけたかい」ことを意識して作るとされる句が複数ある。代表的なのは表の三句目、「第三」だ。各面の折立の句も同じ。また二花三月の、中でも句の花や長句の秋月についても、そのことをかなり意識する。

だが「丈高たけたかい」とはどういうことか、必ずしもはつきりしていないのではないだろうか。

『猫蓑通信』第五号(1991年)には、第三についての東明雅先生の次のような文章がある。

「次に第三を丈高くする方法として説かれるのが『すみのてにはを切る』ということですが、これは簡単に言ってしまうと、一句の中で、余分な助詞をなるべく省くということです。たとえば、

月高あつたまし四阿あつまに酔よを『冷ましぬて

鯨釣くじまりの人の傍かたはら』に『猫もぬて

小面こおもての視野しよの人』は『みな爽さわかに

鍵括弧内の助詞は省略しても意味がよく分り、また省略することで一句がすっきりします。」

『十七季』第二版(2007年)「連句概説」にも、同じく第三に関連して「すみのテニハを切る」ことについての解説があり、

夏近なつちかきコーヒーミルク「の」からやかに

ワンルームゆかりの雛ひな「を」飾りぬて

この二句を例として上げている。これも鍵括弧内の助詞を省略するということだ。

以上の五例はすべて、中七句切れのテニハを省略して軽い切れを作った形だ。しかし私たちが普段、第三のテニハ切りの典型としてまず思い浮かべるのは、上五のテニハを省略し、体言切れにした形ではないだろうか。現代の第三の作例ではそのほうがはるかに多い印象がある。なぜ、そうした例がここに含まれないのか。

私の推測だが、これは上五切れの句形が往々にして行き過ぎ、上五と中七下五の内容が大きく飛躍した、発句型の二物配合二句一章体になりかねないことを危惧されたからではないだろうか。中七末を切った二物配合句もあるが、中七切れはむしろそうならないことが多い。

テニハ切りの体言切れについてはないが、芭蕉俳諧で平句に切字を使った少数の例外について明雅先生が説明された文章のなかに、次のようなくだりがある。

「流石に、『や』・『かな』などの切字は、芭蕉関係の作品中、平句に用いられることはすくない。しかし、探せばいくつかの例を見ることができる。

初はつはなの世とや嫁よめのいかめしく

市いちに出てしばし心をしはすかな

やぶ入やぶいりの嫁よめや送おくらんけふの雨

妹いもがりや溝みぞに穂蓼ほたれの生な茂もり

かげろふや海手うなての花はなの盛もなり

一株の薄は物に似たるかな

などは、これらの切字の働きによって二句一章の体となり、句の中の季語と相俟って完全に一つの美術的世界を作り出し、殆ど発句と同じ相を呈している。これでは連句では困るのである。そもそも連句は前句と付句両句の付け合わせによって、一つの芸術的世界を創り出すものであるが、その前句あるいは付句が、その一句の中ですでに完璧な世界を創り出しているとすれば、さらにその句につける事は蛇足であり、無意味であろう。これでは困るのであって、私が平句に『や』・『かな』を嫌った理由はここに存するのである。」(平句の切字について)『猫蓑通信』第二十二号(1996年・傍線筆者)

上五体言切れでもテニハを補えば文脈がつかざる句は二物配合の発句型ではなく、第三などの付句にも使えるが、そうでない場合は切字で途中を切った句と同じ、発句型の一句独立的な句だ。切れの前後の関係は、連句の前句と付句の付け合い関係と同じで、それだけで完結した「一つの芸術的世界」を作り出す。

上五句切れの位置にテニハがあるかないか、という句形の違いだけでは発句型と付句型を区別できないので、「丈高く」するだけのつもりの第三や月花の句が、発句型の二句一章体になっている例は案外多いのではないか。発句型の句は「一つの芸術的世界を創り出」すので、それが「丈高たけたかい」ことと混同されるといふ面もあるかもしれない。しかし「これでは連句では

困る」というのが明雅先生の考えだった。上五切れを濫用すると、五七五各部分がぶつ切れの「三段切れ」や、上五と下五両方を体言だけで占める「煙管型」(ほとんどの場合上五と下五を置換してもほぼ同義になる不安定さを持つ)などの悪形にも陥りやすい。連句一卷の途中に発句型の句やこれらの悪形の句が挟まると、付けと転じの流れもそこで切断されてしまう。

●芭蕉俳諧の「第三」の実際

明雅先生が第三の「テニハ切り」の例として上五のテニハを切った例を出されなかったことと関連して、芭蕉歌仙にも上五切れの第三がありえないことにも思い当たる。『芭蕉七部集』所収の、芭蕉出座歌仙全二十巻の第三を総覧してみよう。★を付した句が上五にテニハのない句。鍵括弧内は筆者が仮に補ったテニハだ。

◎冬の日 五巻

有明の主水に酒屋つくらせて 荷兮

野菊までたづぬる蝶の羽おれて 芭蕉

歯朶の葉を初狩人の矢に負て 野水

★花蘇「は・が」馬骨の霜に咲かへり 杜國

★檜檜「の」山家の体を木の葉降 重五

◎阿羅野 一卷

★藤ばかま「を」誰窮屈にめでつらん 芭蕉

◎ひさご 二巻

旅人の虱かき行春暮て 曲水

蝙蝠ののどかにつらをさし出て 路通

◎猿蓑 四巻

股引の朝からぬる、川こえて 凡兆

★二番草「を」取りも果さず穂に出て 去来  
★新畳「を」敷ならしたる月かげに 野水  
雲雀なく小田に土持比なれや 珍碩

◎炭俵 四巻

家普請を春のてすきにとり付て 野坡

上張を通さぬほどの雨降て 岱水

番匠が檜の小節を引かねて 孤屋

下看を一舟浜に打明て 芭蕉

◎続猿蓑 四巻

初荷とる馬子もこのみの羽織きて 馬見

大根のそだたぬ土にふしくれて 芭蕉

水かるる池の中より道ありて 支考

鶯はいつぞの程に音を入れて 臥高

★の句はどれも、発句型の取り合わせ句ではない。テニハを補えば一句を一貫した意味で理解できる。それにしても全二十句中五句、二十五%にすぎない。「軽み」を強く意識したとされる後期蕉風の三集『ひさご』『炭俵』『続炭俵』に一例もないことも注目に値する。

第三にかぎらず、以上二十巻の発句を除く付句各三十五句(計七百句)に占める上五切れの数、比率も調べてみた(体言切れ以外に切字による切れも含む)。あくまでも私の読み方だが。

◎冬の日 五巻中十二句 約六・八%

◎阿羅野 一卷中五句 約十四%

◎ひさご 二巻中五句 約七%

◎猿蓑 四巻中十句 約七%

◎炭俵 四巻中八句 約五・七%

◎続猿蓑 四巻中六句 約四・三%

二十巻の全七百句中四十六句、六・五%、一

巻平均では二・一句に過ぎない。後期に減る傾向もおおむね同じだといえるだろう。

●現代の「第三」の実際

『十七季』の「付合例句集」は第三の実際を古典と現代合わせて三十九例収録している。そこに含まれる上五切れ(上記と同様)は九例、全体の約二十三%で、七部集芭蕉歌仙全体の第三に占める上五切れの比率とほぼ同じだ。ここから、明雅先生が第三の作り方として上五切れを特に推奨されていたわけではないと思う。

ところが、少し前、『猫蓑通信』の百十号(2019年七月刊)から百十四号(2021年四月刊)までの五号分に掲載された連句作品の第三を総覧してみたことがある。この五号は合計で百二十五巻の新作連句を収録している。当然、第三も百二十五句ある。そのうち、上五切れは半分以上の六十八句、五十四・四%あった。私の捌いた巻や、私の付けた第三にもある。最も極端だった第百十一号では、なんと第三全体の七十一%が上五切れだった。

もちろん、個々の作品については第三が上五切れでいけないということはない。しかしこれほど多数に偏ると明らかに単調に感じる。それだけでなく、芭蕉歌仙や明雅先生の挙げた例との間に二倍以上もの頻度の乖離がある。この一辺倒の背景に、何か見落としや思い違いがあるのではないかと反省せざるをえない。「丈高い」(長高い)とはいったい何だろう。続いてそのことを考えてみよう。(p.9・2段目へ続く)





少女の座  
二十韻「幼年の空」 鈴木千恵子 捌

ぶらんこや幼年の空高かりき 千恵子

つはぶき群れてリズム取るかに 敏枝

親猫と仔猫との戯れ切りもなし 健

留学生に和菓子振る舞ふ 美智子

ウ 月凍つるフード目深に帰る道 志保子

念仏の声冬安居なり 枝

駆落ちを涙ながらに頼まれる 智

重い財布に揺れる尻軽 健

夢に見た豪華客船乗り込んで 志

正体不明流行るウイルス 千

ナオゲルニカの絵に乾杯のビール干す 健

氷いちごで口が真つ赤に 枝

厚化粧してゐる女性専用車 千

銀座のママが拾ふ銀杏 志

残月に二人の影のよりそひぬ 枝

在の案山子は伏し目がちに 健

ナウ 椀盛の蒸し蓮根に餡を掛け 志

池辺に立てば鯉の寄り来る 千

花に吹けブラスバンドの長き列 健

メーデーを行く帽子いろいろ 執筆

連衆 箭内敏枝 由井健 聖成美智子  
北龍志保子

「発句もどきの付句をやめよう」p7から続く

●「長高い」の本来の意味

『広辞苑』第七版の「たけ【丈・長】」の項の五番目に以下のようにある。

⑤（歌論用語）品格。風格。幽玄（優雅典麗の美）と対立させて、崇高壮大な美をいう。後鳥羽院御口伝『やまと歌を詠ずるならひ…或はうるはしく長ある姿あり』

しかし、後鳥羽院や定家の時代の歌論では、「長高い」は「幽玄と対立」する「崇高壮大」などという意味ではなかった。むしろ逆だ。たとえば定家の歌論とされる『毎月抄』。

「ただ素直にやさしき姿をまづ自在にあそびししたためて後は、長高躰、見躰、面白躰、有一節躰、濃躰などやうの躰はいとやすき事にて候。鬼拉の躰ぞたやすくまなびおほせ難う候なる。それも鍊磨の後はなかよまれ侍らざらむ。初心の時よみ難き姿にて侍るなるべし。まづ歌はただ和国の風にて侍るうへ、先哲のくれぐれ書き置ける物にも、やさしく物あればによむべき事とぞ見え侍るめる。げにいかにか恐ろしき物なれども、歌によみつれば優に聞きなざるたぐひぞ侍る。それに、もとよりやさしき花よ月よなどやうの物を恐ろしげによめらむは、何の詮か侍らむ。さても、この十躰の中に、いづれも有心躰に過ぎて歌の本意と存する姿は侍らず。」（小学館新編日本古典文学全集『歌論集』所収）

「鬼拉躰」も含め、すべて広義の「有心躰」のうちで、どれについても「素直にやさしき姿」が基本だとしている。ここで「恐ろしげ」とは

ホラーではなく、生硬で優美さが欠ける感じを否定的にいう言葉だ。「崇高壮大」は和歌の美意識にとつて異質な漢文的要素で、そのように異質に際立つ形を打ち出すのは決して雅びではない。むしろ「鬼拉躰」こそがそれだろう。しかしそうした歌ですら、鍊磨の後は「優に聞きなざるる」ように詠むこともできるとしている。「長高躰」そのものについては説明していないが、校注はそれを「声調の緊張を保った流麗感が強く感じられる詠風」としており「崇高壮大」などとは関係ない。「素直にやさしき」幽玄な姿は他と同じで、中でも特に声調の優れた歌を「長高き」歌とするということだろう。

●「長高き」歌のチャンピオンは藤原良経

『広辞苑』が引き合いに出した『後鳥羽院御口伝』は次のようにも書いている。「故摂政（藤原良経）は、たけをむねとして、諸方を兼ねたりき。いかにぞや見ゆる詞のなき、歌ごとに由あるさま、不可思議なりき……」。後鳥羽院は決して「崇高壮大」などと形容していない。

皇族や高位の公家の詠歌は、肩に力を入れていい歌を詠もうとしたりしない、自然で大らかな感じこそがよいとされる。良経はその点で定家や西行も及ばない。後鳥羽院も定家もそこを評価していたのだろう。（p11・2段目へ続く）

濔標の座

二十韻「記憶てふ」 鈴木了齋 捌

記憶てふものふる淡き雪の降る 了齋  
かくれんぼせし広き梅林 聰  
屋根職ら雁の帰るを仰ぎ見て 荷夕  
暖簾が風に揺れる銭湯 健  
レモン水喉ゆく径のありありと 聰  
夏の宿題終はらないまま 齋  
川床に並んで月の出を待ちぬ 健  
ハートマークが絵馬に沢山 夕  
奥社にて何か始まる神の留守 齋  
念仏唱へ壺振りを待つ 聰  
ナオ 虎造の大団円の唸り節 夕  
背面跳びで漸くに越え 健  
報せ来る幾山河を隔てつつ 聰  
除隊の沙汰を許嫁へと 齋  
砂糖菓子分ける月下の幼な妻 夕  
後の袷がひそと質屋へ 健  
ナウ 冷やかに税の影の石畳 齋  
公園前に止まるタクシー 夕  
大鼓を打てばひとひら花の舞ひ 聰  
朝寝朝酒遊芸三昧 健

連衆 杉本聰 西田荷夕 由井健

絵合の座

二十韻「白一色の」 鈴木千恵子 捌

武蔵野は白一色の春の雪 千恵子  
薄紅梅の香る庭先 未悠  
古本屋店主のハタキうららかに あき子  
みんなが並ぶ循環のバス 志保子  
組み鐘の塔を満月横切つて 悠  
髭面市長歩むうそ寒 千  
乾杯し後はひたすら濁酒 志  
誘惑される甘い吐息で あ  
衣擦れの音だけのする寡婦の閨 千  
地球の危機も我関せずと 悠  
ナオ すいすいと夕陽ひつばる鴨の水脈 あ  
外堀通りカフェの大窓 志  
抱き寄せてみればロボット悲しげに 悠  
あなたの心少しください 千  
小夜曲のかすかに響く月涼し 志  
観音堂へ急ぐ階段 あ  
ナウ 姉君は妹の夢を買ったとか 千  
懐中時計カチカチと鳴る 悠  
ご無沙汰をかしこみ詫びる花便り あ  
紙風船を高く打ち上ぐ 志

連衆 棚町未悠 岩崎あき子 北龍志保子

松風の座

二十韻「龍の雲」 佐々木有子 捌

春空に寝そべつてゐる龍の雲 有子  
休校続く土手の草萌 濤声  
新社員デスク回りを整理して 香織  
コンビニスナック試すいろいろ 雅子  
月の下子ども神輿の写真撮る 敦子  
日焼けの腕のぞく半纏 有  
傷心の海岸通りぶつ飛ばす 声  
ラブコメディが拾ふ伏線 織  
ひよつとしたところから出る革財布 雅  
過疎の村より五輪入賞 敦  
ナオ 福は内鬼も内とて豆を撒き 有  
風邪の服薬ほどほにする 声  
ジェラシーを隠せば胸の高なつて 敦  
秋の宿には甘き残り香 雅  
端正の月が路地裏明るくし 織  
みみでらはんめう潜む草叢 有  
ナウ 酒好きがくさやの干物好きなき 声  
夢の島にて踊るダンサー 織  
来し方を綴る文机花の窓 雅  
囀の中自転車を漕ぐ 敦

連衆 小原濤声 平林香織 武井雅子  
武井敦子

関屋の座  
歌仙「練切」  
近藤純子 捌

練切のくれないなぬ滲む春の雪 純子  
 ほの咲き初むる常磐まんざく 鄭和  
 雛遊年長さんがお世話して 暁巳  
 みんなピースの写真アルバム 太郎  
 まん丸な月懸かり来る岬口 和  
 流れ星追ふ静かなる夜 純  
 猪道を辿り尾上の松に出で 太  
 牧を閉ざして交はず接吻 巳  
 髪まとめ始発電車に手を取りて 純  
 そつとりングをはめ直す時 和  
 テイファニーで喰らふ朝食僕の夢 巳  
 城下鱈雑魚に混じつて 太  
 走り梅雨堰の流れを乗りきれば 和  
 雲の彼方に目指す山並 巳  
 着陸のコックピットは慌ただし 太  
 アイロン効いたワイシャツの白 純  
 花衣差す手引く手に月円か 巳  
 八十八夜の数へ唄聞く 和  
 ナオ 突然に小さき胡蝶の飛び立てり 純  
 剣豪さつと刀納める 太  
 飴を買ふ子が前にゐる紙芝居 巳  
 お代は観てのお帰りと謂ふ 和  
 ライオンに睨まれたのがトラウマに 太  
 冬至湯に入りほつとする時 純  
 乳房には自信があるの触つたら 和  
 妻の寝言を夫気にする 太

関ヶ原どちらにつくか大博打

石油の価格米口攻め合ふ 全  
 月出でて虫の集きのなほ高し 太  
 ぶらぶら揺らす青き瓢箪 和  
 ナウ 去来忌の湖の風浪身に受けて 巳  
 訪ふ人なしに弥陀の尊像 太  
 それぞれの特技生かしてポランティア 和  
 本陣跡を守る相談 巳  
 石礮に歩み止めたる花吹雪 純  
 巣立ちの鳥のこぼれ去り行く 太  
 連衆 高山鄭和 島村暁巳 功刀太郎 和  
 令和四年二月十一日 起首  
 同二十五日 満尾(後半文音)

「発句もどきの付句をやめよう」p9から続く

良経の代表歌を二首あげてみよう。  
 み吉野は山も霞て白雪の  
 降にし里に春はきにけり(新古今集巻頭)  
 人すまぬ不破の関屋の板びさし  
 荒れにしのちはただ秋の風(新古今160)  
 こういう歌こそが当時「長高い」と考えられていた。後に芭蕉は右の二首目を下敷きに「秋風や藪も畠も不破の関」の発句を詠んでいる。

●和歌、連歌、俳諧の推移

「隅のテニハを切る」という言葉は漢文読み下しとの関連で生まれた。テニハ切りで生まれ

る「格調」とはつまり漢文脈に寄ること、和歌、連歌の側から見た「長高い」とはむしろ逆方向だ。だから連歌ではテニハ切りが少ない。発句が「一ふしを案じ入れ(一つ際立った工夫を入れ)てする」(二条良基『筑波問答』)ものだからこそ、連歌の第三はそうではない、当時の意味で「長高い」姿が求められたのだろう。

しかし連歌との差別化を強く意識した談林俳諧は発句、付句とも技巧的になり、発句も第三も上五を体言で言い切ることが増えた。

蕉風初期、『冬の日』と『阿羅野』の第三には談林の名残を残す上五切れが三句あるし、内容も趣向を凝らした句が多い。しかし芭蕉俳諧の付句では後期になるほど、自然に言葉が流れ下る、古典的な意味で「長高い」句が増えたことは既に見た通りだ。連歌から一回りして元へ戻ったようだが、まったくの回帰というより、題材の「雅」「俗」といったことにかかわらない、無色透明なところに抜け出た趣がある。「軽み」の俳諧は「上善の酒は水の如し」と似ている。

第三に限らず、肩に妙な力の入った発句もどきの付句をやめたい。名水の味は無味に近いからこそ、季節や飲む人、飲む状況によって変わる。連句の付句も、そのような付句こそ次の付句によって輝き、読者によって輝く。それが理想ではないだろうか。すると読者が可能性の中の連衆としてそこに加わることもできる。それは、歌垣の掛け合いに誰でも参加できた時代への回帰でもあるかもしれない。(おわり)

第二十六回 (令和四年)

えひめ俵口全国連句大会受賞歌仙六卷

153

愛媛県知事賞

歌仙「秋高し」 高塚霞 捌

鉄の新大橋や秋高し 霞  
 野分過ぎたる空に昼月 徹心  
 到来の玉蜀黍をゆで上げて 忠史  
 よく喋る兎に寡黙なる犬 孝子  
 穏やかに第二楽章始まりぬ 千恵子  
 スケート靴で描く円形 千  
 白銀の稜線に神在すらん 孝  
 一途の恋を徹す姫宮 全  
 あなただけ見つめてこの身蛇と化し 千  
 顔に出さねど酒はしたたか 史  
 三連単とつた帰りはタクシーで 心  
 生国問へば北の浜辺と 孝  
 白鳥の群にぎやかに月の下 史  
 プリンシパルになる夢を抱き 孝  
 遅くまでおやつ持参の塾通ひ 心  
 持ち主知れぬ錆びた自転車 千  
 上水に情死もありし花の影 孝  
 ダブルベッドに鐘朧なり 史  
 ナオ口髭に触れてかたびら雪の消え 心  
 三代続く城の門番 史  
 香しき菓子を焼くの趣味として 孝  
 南回りのけふのフライト 全  
 アメリカの株の上下にそはそはし 心

桶屋儲かる仕組複雑

見習ひの鵜飼あやしき綱さばき

鼓打ち合ふ気合厳しく

この先は矢来巡らす関所跡

刑事の勘が狙ふグラマー

女掏摸月夜に曝す脚線美

金の鯉跳ねて爽やか

ナウ法師蟬やうやく声の調ひて

方丈様は筆を湿らす

冷やかしたあげく立ち去る道具市

また日本人イグノーベル賞

飛花落花デイズニード列長き

風船を手に家路辿れり

連衆 佐藤徹心 根津忠史 坂本孝子

鈴木千恵子

令和三年十月三日首尾 於 江東区芭蕉記念館

いざ松山……霞の一大事

高塚霞

今年の春は思いがけぬ形でやってきました。

三月七日、郵便受けに俵口からの封書が届きました。入選？ もしかして入賞？ 期待を込めて開封したら、なんとなんと、書面の文字は「県知事賞受賞」でした！

コロナ禍のパンデミックにより一昨年、昨年の俵口大会では募集、選考、賞状授与(送付)、作品集発行はなされたものの、連続二十五周年

越えた大会は開催されませんでした。

一昨年は、思い切って大会に出席しようと準備をしましたが、あえなく沈没。チャンスは失われたかに思えたのですが、関係者の皆様のご努力により開催されました三年ぶりの大会で県知事賞に与りましたのは、一世一代の幸運と松山行きを決めました。

お世話になった大会関係者の方々、作品集でお名前を存じ上げていた方などにご挨拶ができましたのは、嬉しいことでした。

歌仙を巻きましたのは、台風一過の江東区芭蕉記念館。森下駅からの道すがら見上げた新大橋と、澄み切った真青な空を、今も思い浮かべることができません。発句は深川芭蕉庵への挨拶句となりました。

コロナ禍に阻まれ、一座しての会が極めて少なくなった中、深川連句会はお世話役の方々のおかげで、会場使用が可能な限り、毎月第一日曜日(会が開かれていました。文音でもリモートでもない、対面しての一座に、充実した楽しい時間が過ぎて行つたのです。

今年七回目を迎えた年女は、今しばし連句に遊ぶつもりでおります。昨年逝去された爽楽庵路子宗匠から、猫蓑会開祖の東明雅先生が掲げられたとお聞きしていた連句三徳、「健康になる」「耄碌を防ぐ」「友だちが増える」を待みに、毎日を過ごせたらと願っています。

選者の方々、大会実行委員の方々、歌仙「秋高し」連衆の皆さまに、心からの感謝とお礼を申し上げます。ありがとうございました！

松山市文化協会長賞

歌仙「髪洗ふ」

衆議判

妻でなく母でもなくて髪洗ふ

千恵子

窓を訪ひ来る虫にキス

聰

アリーナの音楽会が始まりて

硯水

座り心地は上々の椅子

千

うただのし眷属集ふ月今宵

聰

庭の隅には笑苺見え

水

西鶴忌デルフト陶器取り出しぬ

千

招くブロンド眼は真青なる

聰

福耳をちよつと抓んでうふふのふ

水

意外な未来告げる八卦見

千

「次期総理」言はれて消えてはや十年

聰

月虹やがて涸れ沼に落ち

水

カムイコタン神は柳葉魚を哀れみて

千

コロポックルがひよいと跳びだす

聰

歌付きの絵本にも飽きぐうすかぴい

水

気ままな猫はうちの三男

千

塀越しの揺れたをやかな枝垂花

聰

袋小路も風光るなり

水

ナオ 開帳の帷覗けば薄暗く

千

転寝誘ふカント・ヘーゲル

聰

ハッシュタグ夢の国行き切符売れ

水

夏休みには自由研究

千

夕焼けの浜辺に続く足の跡

聰

地球の丸さ妙にくつきり

水

蓬萊に不老の葉あると云ふ

千

艶につれなき姫のためなら

聰

分捕つた宝石飾るパイレーツ

水

ゴブレット揚げ呷る葡萄酒

聰

月照らす富士の名を持つ里の山

千

雁の群るるは乱数に似て

水

ナウ 定点に秋のストール巻いて立ち

千

次を回れば文房具カフェ

水

今日もまた思ひも寄らぬ新製品

聰

舌を噛みさう特許許可局

千

花散らす高天ヶ原の手品師よ

水

稚の浮かべる笑みののどろか

執筆

連衆 鈴木千恵子 杉本聰 矢崎硯水

令和三年六月七日起首 同七月二日満尾

文音

愛媛新聞社長賞

歌仙「ひかり鏝め」

荒木鑑 捌

初霜にひかり鏝め落葉かな

桜千子

はや笛鳴きを窺へる窓

孝子

兄おととSL模型走らせて

通齊

アニメーションを仮想世界へ

一有

中天に孤高の月の円かなり

霞

家路の袖に雀る草の実

鑑

ウ 新米のお焦げ嬉しき握り飯

桜

隣の席から粋な流し目

斉

キューピッド矢の方向を間違へて

桜

千里の馬で攫ふ姫君

孝

楼蘭に眠る木乃伊の衣を解き

霞

団扇はたはた湯上りの月

孝

風神も雷神も棲む雲の峰

斉

乞食袋に詩の種を入れ

桜

警策を背に頂くも有り難く

孝

走り高跳び記録更新

霞

花散るよ分教場跡水飲場

有

幼な子の吹くたんぽぽの絮

斉

ナオ 薬売り紙風船をおまけにと

桜

国威を競ふ宇宙開発

鑑

地に足が付かぬ野郎の法螺嘶

孝

何はともあれ酒だワインだ

桜

糟糠の妻にもあるぞ密事

孝

雪夜しつぽり溶けてゆく肌

全

純愛の氷柱の刃胸を刺す

霞

財政危機を託す次世代

有

ウイルスのパンデミックも新型に

孝

鈴の音響く秋のお遍路

斉

月影の湖に愁ひの息を吐き

桜

腹太らせて鰻下れり

孝

ナウ 牧閉ざす少年の帽うしろ前

霞

口惜し涙か老いの目薬

孝

田舎より同窓会の知らせ来て

斉

勝負を決める4一の銀

桜

どよめきに花も舞ひ飛ぶ競技場

鑑

春にこだますフォスターの歌

有

連衆 鵜飼桜千子 坂本孝子 菅原通齊

白石一有 高塚 霞

令和三年十二月五日首尾

於江東区芭蕉記念館

第二十六回（令和四年）

えひめ俵口全国連句大会受賞歌仙六卷  
456

南海放送賞

歌仙「火色かな」 白崎ひろ子 捌

風穴を出て鶏頭の火色かな ひろ子  
 つくつく法師のシャワー一斉 枯野  
 零余子めし男料理に月笑みて 君枝  
 物にできない整理整頓 ひ  
 理髪店サインポールのくるくると 野  
 バイク仲間のサングラス好し 枝  
 仰向けの肋に刺さる西日の矢 ひ  
 するりと逃げた君は人魚か 野  
 博多帯解けるまでのもどかしさ 枝  
 阿修羅は眉根悩ましく寄せ ひ  
 在るものを無いことにする公文書 野  
 箆笥の奥に寝かすへそくり 枝  
 高き月百万石の雪吊に ひ  
 歓喜の歌が年の空へと 野  
 やつとこさ完治退院荷を下ろす 枝  
 後付いてくるロボットの犬 ひ  
 肩に添ふ若枝やさしき花回廊 野  
 土塁も門も霞む城跡 枝  
 ナオ 田返の農夫そちこち嶺遠し 野  
 売薬さんのおまけ楽しみ 枝  
 マラソンでテープ切る夢今も尚 ひ  
 ジャズの街へと豪華客船 枝  
 揺れながら愛の深さを測りかね 野

縋りついたはいかづちのせみ ひ

螺旋階段行き着く先は開かずの間 枝

ガウデイの聖堂やがて完成 野

たらちねの母描きたく鉛筆画 ひ

埴輪のまなこ吾を見返す 枝

良夜なり秘蔵スコッチ注ぐバカラ 野

村芝居ではいつも脇役 ひ

ナウ 路線バス紅葉坂から海へ抜け 枝

ちよいと貫禄盛り場の猫 ひ

折り入つてお話ししたき儀のあれば 野

要らぬ音まで拾ふ補聴器 ひ

花の香の漂ひきたる囀り口 枝

そぞろ浮き立つ弥生つごもり 執筆

連衆 橋本枯野 梅田君枝

令和三年十月十一日起首 同十一月十一日満尾  
文音

楽しい迷路で

白崎ひろ子

連句という文芸があるからと誘って頂いたのは約十三年前でしたが、俳句は元より何の素養も無い私はその敷居の高さに怖気づき、二年もの間入会を躊躇しておりました。  
 漸く心惹かれて訪れた武生連句の会には亡き二村文人先生がいらして、柔らかな手解きを通して連句の楽しさに触れさせてくださいました。  
 ところが入門者の無邪気さのまま三年足らずが過ぎた平成二十四年、師の急逝に接する事と

なり、会も私も喪失感に打ちひしがれました。ああ今以てあの躊躇の二年間が悔やまれます。

幸いにもその後、師のご縁に繋がる合同連句会や添削・文音での手厚いご指導を賜り、連句には至る処に師あり！と感慨一入でした。青木秀樹・鈴木千恵子両氏はじめお世話をかけた先輩方にもあらためて感謝申し上げます。

連句はまた親しむ程に奥深く、当初その奥深さは真直ぐ奥に続くものと思っていた処、実は迷路みたいだと気付き始めたのは、無邪気さが幾分落ち着いたからか方向音痴の故なのか。未だに自分は入口近くをグルグル徘徊しているだけかも、という気分時に捉われます。

迷路は連句の道ばかりでなく一巻の中にも絶えず潜んでいて、付けと転じの距離感を見失ったり、落ちてはならぬ穴にまんまと嵌り込んだり、胸突き八丁で難渋したり等々。

一人なら到底這い出せないと思えるそんな迷路でも、連句には捌というガイドと連衆という頼もしい連れがいて、巻それぞれの景色が広がる満尾という出口を目指します。そして辿って来た迷路は忽ち懐かしい思い出の小路となります。今回の「火色かな」も気心の知れた三人で声を掛け合い、笑い合いながら、おもしろ迷路を滑ったりこけたりして通り抜けたのでした。入賞というご褒美まで頂けるとは思ってもおらず、私達には嬉しい励みです。

これからも連句の楽しい迷路で、連衆の皆様と共に心地よく遊べたら幸せです。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

愛媛朝日テレビ賞

歌仙「沈黙に」

鈴木了齋 捌

沈黙に沁入る雨や栗の花

了齋

幽かに光るさがにの糸

千恵子

終盤をあと四手まで追ひつめて

肇

さがる嘶家額打ちつつ

孝子

親兄弟月見の宴の騒がしく

香里

スケボーターン決めて爽やか

孝

ハロウインの仮面で隠す涙跡

肇

刑期終はるを待ちますと言ふ

千

かもめどり飛んだだけでもつのる恋

斎

あるじ失くした舟が寄りつき

肇

白乾児の凍つた瓶が棚にあり

孝

霜を蹴散らす民兵の月

全

ぴつたりと音程の合ふ気持ちよさ

斎

脳内麻薬飽和状態

肇

占のけふの山羊座は一位にて

千

良いこと以外信じない人

里

空拳で花洛を目指す心意気

肇

勝馬の背に響く春雷

孝

ナオ 日矢そそぐ鯨曇の狭間から

斎

羽黒修験が真言をあげ

肇

断食のあけていただくお饅頭

千

価値観変へる金次第にて

孝

地球儀の中の日本の小ささよ

全

蟻は休まず歩き続ける

千

避暑村に冒険好きなお嬢さん

肇

二人乗りする背なに頬擦

千

ハピネスの素は互ひの思ひやり

里

したいこととして時間忘るる

全

月の夜も津軽小衣の針を刺し

千

婆がどぶろく満たすかはらけ

肇

ナウ 魚臭き煉瓦倉庫の冬隣

孝

お散歩コース犬も大好き

里

車椅子押して気がつく上り坂

千

記念切手は明日発売

肇

たそがれの花にゆふつつ光りそめ

斎

額に降りた蒲公英の絮

里

連衆 鈴木千恵子 宇田川肇 坂本孝子

式田香里

令和三年六月二十一日起首 同七月十七日満尾

於 庚申文化会館 ナウ文音

俵口実行委員会会長賞

歌仙「詩の生まる」

西田荷夕

捌

白秋や落葉松林に詩の生まる

荷夕

深山茜の舞ひ遊ぶ里

千晴

父と子の豆名月の影ならん

夕

模型玩具のレール繋いで

晴

副都心空中回廊縦横に

夕

外套の襟立てた旅人

晴

ウ 冬銀河コロラトウーラの吸はれゆき

夕

ラヴ取り戻す夢は正夢

晴

纏足の后帳に潜みたり

夕

震へる猫を胸に抱き上ぐ

晴

五時から値下げしますとアナウンス

夕

厭はず並ぶ長い行列

晴

短夜の月は中天皓皓と

夕

戦場ヶ原渡る涼風

晴

弁当は無人の駅の木のベンチ

夕

オーディションへと馳せ参すべく

晴

花吹雪そろそろ仮面出る場面

夕

春宵一刻千金の酒

晴

ナオ 浮き鯛を掬ひ取つたる舟の上

全

漁港近くの農家民宿

夕

幼な児にシーツの糊が強すぎて

晴

誕生ケーキ残るひととき

夕

未来から届いたやうな針の穴

晴

駱駝の睫毛凍りつくかに

夕

難民の救済叫ぶ慈善鍋

晴

献血ルームに昇る階段

夕

さりげなき君の男気胸キュンと

晴

妻と名乗つてスカートを穿き

夕

月代の三面鏡に浮かぶ影

晴

精霊流し水の揺れつつ

夕

ナウ 軒下に残る燕の愛らしく

晴

老舗を継ぎし次男奮闘

夕

拘りの逸品求めブラジルに

晴

移民の裔の二礼二拍手

夕

伸びやかに花の扉を押し開けて

晴

ふはりゆつたりたんぽぽの絮

執筆

連衆 福永千晴

令和三年十月四日起首 同十一月十七日満尾

文音

●既往の行事

- ・令和四年四月二十一日、江東区芭蕉記念館にて第百五十九回猫蓑会例会（春季例会）を開催。五卓に分かれ二十韻を興行。当日作品と、正式俳諧二十韻を五月二十五日に亀戸天神社に奉納しました。これらと、奉納後直会での二十韻二巻は今号に掲載。
- ・令和四年六月二十六日、アルカディア市ヶ谷にて第三十二回猫蓑同人会総会を開催。議事ののち六卓に分かれて源心を興行。作品は次号に掲載予定です。

●今後の行事予定

- ・七月二十一日（木）に、第百六十回猫蓑会例会（猫蓑総会）を江東区芭蕉記念館にて開催予定。
- ・十月二十七日（木）に、第百六十一回猫蓑会例会（芭蕉忌・明雅忌）を江東区芭蕉記念館にて開催予定。あわせて正式俳諧を興行予定。
- ・令和五年一月二十二日（日）に、第百六十二回猫蓑会例会（令和五年初懐紙）をアルカディア市ヶ谷にて開催予定。

●猫蓑会リモート（Zoom）連句会

- ・二月十一日（金）開催の猫蓑会リモート第七回と、四月九日（土）に開催の第八回の作品を今号に掲載。六月四日（土）に開催された第九回の作品は次号に掲載予定です。
- ・「猫蓑会リモート」は原則として偶数月第二土曜日の午後一時から開催しますが、八月に予定している第十回は、八月十一日（木）、祝日「山の日」の開催に変更します。ご注意ください。

●リモート連句講習会を開催します

- ・ご希望があれば奇数月第二土曜日午後「猫蓑会リモート室」にてリモート連句講習会を開催します。筆記係やホストを務めるために必要な事柄も。

ご希望の方は、平林香織《khira84@gmail.com》宛にメールでお申し込み下さい。その他の「猫蓑会リモート室」使用申し込みも平林まで。

●会員の受賞

- ・令和四年第二十六回えひめ俵口全国連句大会
  - 愛媛県知事賞
    - 歌仙「秋高し」 高塚霞 捌
  - 松山市文化協会会長賞
    - 歌仙「髪洗ふ」 衆議判
  - 愛媛新聞社長賞
    - 歌仙「ひかり鏝め」 荒木鑑 捌
    - 南海放送賞
      - 歌仙「火色かな」 白崎ひろ子 捌
    - 愛媛朝日テレビ賞
      - 歌仙「沈黙に」 鈴木了齋 捌
    - 俵口実行委員会会長賞
      - 歌仙「詩の生まる」 西田荷夕 捌

以上六作品を今号に掲載しています。

●猫蓑基金にご協力ありがとうございます

- ・橘 文子様 令和三年十月 三千元
- ・五郎丸照子様 令和四年四月 三千元
- ・矢崎 藍様 令和四年五月 一万二千元
- ・井口あやこ様 令和四年五月 五千元
- ・基金口座 みずほ銀行新宿新都心支店

猫蓑基金 普通預金 3376045

●会員の俳号変更

- ・西田一枝↓西田荷夕かゆふ

●会員の転居

- ・岩田蝸舎 東京都八王子市から茨城県鹿嶋市へ
- ・山中たけを 千葉県柏市から千葉県千葉市へ

●新会員

- ・福澤をんみ（東京都） 令和四年七月入会
- ・広川一美（新潟県） 令和四年七月入会

●新同人

- ・北龍志保子

●会員の訃報

- ・菅原通斉様が令和四年六月五日に永眠されました。享年七十七歳でした。謹んでご冥福を祈ります。

●「猫蓑通信」バックナンバー

- ・猫蓑会公式サイト《<http://www.neko-mino.org/>》

季刊 『猫蓑通信』 第百十七号  
令和四年七月十五日発行

発行人 猫蓑会 青木秀樹  
事務局長 佐々木有子

〒161-0033 東京都新宿区下落合4-9-34・313

編集人 鈴木了齋

編集委員 奥野美友紀・佐々木有子・鈴木千恵子・武井雅子・平林香織・御園魚彦（五十音順）

印刷所 印刷クリエート株式会社